



「小野忠明起請文」（山根家文書2(7の7)）



きたえる ②

## 甲州流

上の写真は、元和9年（1623）に一刀流の使い手として知られる小野忠明が、小幡景憲に宛てて出した文書です。おおよその内容は、「甲陽軍鑑」の奥義をよく知っている小幡から「武田信玄公御流軍法」を相伝したからには、小野は許しを得ないまま勝手に他人に教えることはしない旨を誓ったというものです。

ここでは、この文書中に見える「武田信玄公御流軍法」や「甲陽軍鑑」、小幡景憲について簡単に紹介してみます。

### 《甲州流とは？》

「武田信玄公御流軍法」とは、甲州流と呼ばれる兵法学のことで、甲州流は、戦国時代の名将とされる武田信玄の徳を慕って興った兵法学の総称です。信玄流とも称されます。事実上の流祖は小幡景憲（勘兵衛）です。

景憲は、長年にわたり信玄の遺跡や武田氏の遺臣を探し求めて、古い記録の入手に努め、また兵法を学んで、甲州流の

学問体系をまとめました。その特色は、中国兵法の理念を踏まえつつ、天文気象・陰陽五行の古伝兵法の要素を含み、さらには信玄の実績を組み入れたところがありました。

甲州流は幕府の兵学の基本となったこともあり、景憲の門弟は二千余人に及んだとされ、その中には和歌山藩主徳川頼宣・桑名藩主松平定綱などの有力大名も数多く含まれています。またその学統は、江戸を中心に各地に広がり、あるいは分派して固有の異なった流派名を名乗って、江戸時代の兵法学界を席捲したのです。

### 《小幡勘兵衛景憲》

小幡景憲（1572～1663）は江戸時代前期の甲州流の兵学者です。甲斐武田氏家臣の小幡昌盛の三男として誕生し、11歳の時に主家が滅亡したため徳川家に仕え、秀忠の小姓となりました。しかし、24歳の時に突如出奔し、正式に帰参が許されるまでの約20年間、各地を流



「甲陽軍鑑」（桂家文書（下関市）和漢 574～577）

甲斐の武田信玄の事績やその家臣たちの行動・心構えなどを記した書物です。信玄家臣の高坂弾正（春日虎綱）が語った内容を大蔵彦十郎と春日惣次郎が筆記したものが根幹をなしており、高坂の死をはさんで天正元～13年（1573～85）頃書き継がれたもの、とされます。本書は、小幡景憲がまとめた兵法学（甲州流）の基本テキストでした。

浪して、兵法や武術を修行することとなりました。この間、関ヶ原の戦いや大坂冬の陣では、浪人身分のまま活動し、戦功をあげました。続く大坂夏の陣では豊臣方として大坂城に入城するも、徳川方に内通して勝利に貢献しました。その功により再び徳川家に仕え、相模国や甲斐国（のち武蔵国）で1500石を領有しました。

前述のように景憲は甲州流の事実上の祖として名高く、門下生は二千人に及んだとされます。また彼は剣術にも優れて一刀流の小野忠明から皆伝を受けています。この小幡景憲と小野忠明との関係に注目すると、小幡は小野から一刀流（剣術）を、小野は小幡から甲州流（兵法学）をそれぞれ授けられました。つまり、この二人

は互いに師匠であり、弟子であったということになります。

《杉山家伝来の文書》

小幡景憲の高弟の一人で、股肱の臣とも称された人物に杉山盛政がいました。盛政の子孫は、その後松平定信に仕えて久松松平家の家臣となりました。幕末期の杉山弘憲は、桑名藩の「軍事奉行」や「武田流兵学師範」を務めており、弘憲の長男・鐵は山根家に入家しました。そういった関係で杉山家伝来の文書が山根家にもたらされ、その中には小幡景憲や甲斐武田氏に宛てられた文書も含まれています。冒頭の、小野忠明が小幡景憲に宛てて出した文書もそういったものの一つなのです。

敬白起請文之事  
 一 武田信玄公御流軍法之事、  
 殊更大事甲陽軍鑑之奥義  
 貴殿御存知ニ付而、相伝仕候上は  
 信玄公貴奉申候、又人ニ申候事は貴殿  
 くるしからすと御申無之以前、をしへ  
 申ましく候、仍如件、  
 癸  
 元和九年 小野次郎右衛門  
 亥三月吉日 忠明（花押）  
 小幡勘兵衛殿  
 参

【甲州流学統図】（吉川弘文館『国史大辞典』の「甲州流」の項目から引用）

